

## CHAPTER 2

首相執務室の窓に垂れ込めていた冷たい霧は、そこから何キロも離れた場所の、汚れた川面に漂っていた。

草ぼうぼうでゴミの散らかった土手の間を縫うように、川が流れている。

廃墟になった製糸工場の名残の巨大な煙突が、黒々と不吉にそそり立っていた。暗い川の囁くような流れのほかには物音もせず、あわよくば丈高の草に埋もれたフィッシュ・アンド・チップスのおぼれでも嗅ぐ当てたいと、足音を忍ばせて土手を下っていく痩せた狐のほかは、生き物の気配もない。

そのとき、ボンと軽い音がして、フードをかぶったすらりとした姿が、忽然と川辺に現れた。

狐はその場に凍りつき、この不思議な現象をじっと油断なく見つめた。

そのフード姿は、しばらくの間方向を確かめている様子だったが、やがて軽やかにすばやい足取りで、草むらに長いマントを滑らせながら歩き出した。

二度目の、少し大きいボンという音とともに、またしてもフードをかぶった姿が現れた。

「お待ち！」

鋭い声に驚いて、それまで下草にびったりと身を伏せていた狐は、隠れ場所から飛び出し、土手を駆け上がった。

緑の閃光が走った。

キャンという鳴き声。

狐は川辺に落ち、絶命していた。

二人目の人影が狐の骸を爪先で引っくり返した。

「ただの狐か」フードの下で、軽蔑したような女の声がした。

「闇被いかと思えばーシシー、お待ち！」しかし、二人目の女が追う獲物は、一瞬立ち止まり、振り返って閃光を見はしたが、たったいま狐が転がり落ちたばかりの土手をすでに登り出していた。

「シシーーナルシッサーー話を聞きなさい……」

二人目の女が追いついて、もう一人の腕をつ

## Chapter 2

### Spinner's End

Many miles away the chilly mist that had pressed against the Prime Minister's windows drifted over a dirty river that wound between overgrown, rubbish-strewn banks. An immense chimney, relic of a disused mill, reared up, shadowy and ominous. There was no sound apart from the whisper of the black water and no sign of life apart from a scrawny fox that had slunk down the bank to nose hopefully at some old fish-and-chip wrappings in the tall grass.

But then, with a very faint *pop*, a slim, hooded figure appeared out of thin air on the edge of the river. The fox froze, wary eyes fixed upon this strange new phenomenon. The figure seemed to take its bearings for a few moments, then set off with light, quick strides, its long cloak rustling over the grass.

With a second and louder *pop*, another hooded figure materialized.

“Wait!”

The harsh cry startled the fox, now crouching almost flat in the undergrowth. It leapt from its hiding place and up the bank. There was a flash of green light, a yelp, and the fox fell back to the ground, dead.

The second figure turned over the animal with its toe.

“Just a fox,” said a woman's voice dismissively from under the hood. “I thought perhaps an Auror — Cissy, wait!”

But her quarry, who had paused and looked back at the flash of light, was already scrambling up the bank the fox had just fallen

かんだが、一人目はそれを振り解いた。  
「帰って、ベラ！」  
「私の話を聞きなさい！」  
「もう問いたわ。もう決めたんだから。ほつ  
といてちょうだい！」  
ナルシッサと呼ばれた女は、土手を登りきっ  
た。古い鉄柵が、川と狭い石畳の道とを仕切  
っていた。  
二人目の女、ベラもすぐに追いついた。二人  
は並んで、通りの向こう側を見た。  
荒れ果てたレンガ建ての家が、闇の中にどん  
よりと暗い窓を見せて、何列も並んで建って  
いた。  
「あいつは、ここに住んでいるのかい？」ベ  
ラは蔑むような声で聞いた。  
「ここに？ マグルの掃き溜めに？ 我々のよう  
な身分の者で、こんなところに足を踏み入れ  
るのは、私たちが最初だろうよ——」  
しかし、ナルシッサは聞いていなかった。  
錆びた鉄柵の間をくぐり抜け、もう通りの向  
こうへと急いでいた。  
「シシー、お待ちしたら！」  
ベラはマントをなびかせてあとを追い、ナル  
シッサが家並みの間の路地を駆け抜けて、ど  
れも同じような通りの二つ目に走り込むのを  
目撃した。  
街灯が何本か壊れている。二人の女は、灯り  
と闇のモザイクの中を走った。  
獲物を追う追っ手のように、ベラは角を曲が  
ろうとしているナルシッサに追いついた。  
こんどは首尾よく腕をつかまえて後ろを振り  
向かせ、二人は向き合った。  
「シシー、やってはいけないよ。あいつは信  
用できない——」  
「闇の帝王は信用していらっしゃるわ。違  
う？」  
「闇の帝王は……きっと……間違っていらっ  
しゃる」ベラが喘いだ。  
フードの下でベラの眼が一瞬ギラリと光り、  
二人きりかどうかあたりを見回した。  
「いずれにせよ、この計画は誰にも漏らすな  
と言われていないじゃないか。こんなことをす  
れば、闇の帝王への裏切りに——」  
「放してよ、ベラ」ナルシッサが凄んだ。  
そしてマントの下から杖を取り出し、脅すよ

down.

“Cissy — Narcissa — listen to me —”

The second woman caught the first and seized her arm, but the other wrenched it away.

“Go back, Bella!”

“You must listen to me!”

“I’ve listened already. I’ve made my decision. Leave me alone!”

The woman named Narcissa gained the top of the bank, where a line of old railings separated the river from a narrow, cobbled street. The other woman, Bella, followed at once. Side by side they stood looking across the road at the rows and rows of dilapidated brick houses, their windows dull and blind in the darkness.

“He lives here?” asked Bella in a voice of contempt. “*Here?* In this Muggle dunghill? We must be the first of our kind ever to set foot —”

But Narcissa was not listening; she had slipped through a gap in the rusty railings and was already hurrying across the road.

“Cissy, *wait!*”

Bella followed, her cloak streaming behind, and saw Narcissa darting through an alley between the houses into a second, almost identical street. Some of the streetlamps were broken; the two women were running between patches of light and deep darkness. The pursuer caught up with her prey just as she turned another corner, this time succeeding in catching hold of her arm and swinging her around so that they faced each other.

“Cissy, you must not do this, you can’t trust him —”

うにベラの顔に突きつけた。  
ベラが笑った。  
「シシー、自分の姉に？ あんたにはできやしないー」  
「できないことなんか、もう何にもないわ！」  
ナルシッサが押し殺したような声で言った。声にヒステリックな響きがあった。そして杖をナイフのように振り下ろした。閃光が走り、ベラは火傷をしたかのように妹の腕を放した。  
「ナルシッサ！」  
しかしナルシッサはもう突進していた。追跡者は手をさすりながら、こんどは少し距離を置いて、再びあとを追った。レンガ建ての家の間の人気のない迷路を、二人はさらに奥へと入り込んだ。  
ナルシッサは、スピナーズ・エンドという名の袋小路に入り、先を急いだ。  
あのそびえ立つような製糸工場の煙突が、巨大な人指し指が警告しているかのように、通りの上に浮かんで見える。  
板が打ちつけられた窓や、壊れた窓を通り過ぎるナルシッサの足音が、石畳にこだました。  
ナルシッサはいちばん奥の家にたどり着いた。  
一階の部屋のカーテンを通してチラチラと灰暗い灯りが見える。  
ベラが小声で悪態をつきながら追いついたときには、ナルシッサはもう戸を叩いていた。少し息を切らし、夜風に乗って運ばれてくるどぶ川の臭気を吸い込みながら、二人は佇んで待っていた。  
しばらくして、ドアの向こう側で何かが動く音が聞こえ、わずかに戸が開いた。  
隙間から、二人を見ている男の姿が細長く見えた。  
黒い長髪が、土気色の顔と暗い眼の周りでカーテンのように分かれている。  
ナルシッサがフードを脱いだ。  
蒼白な顔が、暗闇の中で輝くほど白い。  
長いブロンドの髪が背中に流れる様子が、まるで溺死した人のように見える。  
「ナルシッサ！」男がドアをわずかに広く開

“The Dark Lord trusts him, doesn’t he?”

“The Dark Lord is ... I believe ... mistaken,” Bella panted, and her eyes gleamed momentarily under her hood as she looked around to check that they were indeed alone. “In any case, we were told not to speak of the plan to anyone. This is a betrayal of the Dark Lord’s —”

“Let go, Bella!” snarled Narcissa, and she drew a wand from beneath her cloak, holding it threateningly in the other’s face. Bella merely laughed.

“Cissy, your own sister? You wouldn’t —”

“There is nothing I wouldn’t do anymore!” Narcissa breathed, a note of hysteria in her voice, and as she brought down the wand like a knife, there was another flash of light. Bella let go of her sister’s arm as though burned.

“Narcissa!”

But Narcissa had rushed ahead. Rubbing her hand, her pursuer followed again, keeping her distance now, as they moved deeper into the deserted labyrinth of brick houses. At last, Narcissa hurried up a street named Spinner’s End, over which the towering mill chimney seemed to hover like a giant admonitory finger. Her footsteps echoed on the cobbles as she passed boarded and broken windows, until she reached the very last house, where a dim light glimmered through the curtains in a downstairs room.

She had knocked on the door before Bella, cursing under her breath, had caught up. Together they stood waiting, panting slightly, breathing in the smell of the dirty river that was carried to them on the night breeze. After a few seconds, they heard movement behind the door and it opened a crack. A sliver of a man could be seen looking out at them, a man with

けたので、明かりがナルシッサと姉の二人を照らした。

「これはなんと驚きましたな！」

「セプルス」ナルシッサは声を殺して言った。

「お話できるかしら？ とても急ぐの」

「いや、もちろん」

男は一步下がって、ナルシッサを招じ入れた。

まだフードをかぶったままの姉は、許しも請わずにあとに続いた。

「スネイプ」男の前を通りながら、女がぶっきらぼうに言った。

「ベラトリックス」男が答えた。

二人の背後でピシャリとドアを閉めながら、唇の薄いスネイプの口元に、嘲るような笑いが浮かんだ。

入ったところがすぐに小さな居間になっていた。

暗い独房のような部屋だ。

壁は、クッションではなく、びっしりと本で覆われている。

黒か茶色の草の背表紙の本が多い。

すり切れたソファ、古い肘掛椅子、グラグラするテーブルが、天井からぶら下がった蠟燭ランプの薄暗い明かりの下に、ひと塊になって置かれていた。

ふだんは人が住んでいないような、ほったらかしの雰囲気漂っている。

スネイプは、ナルシッサにソファを勧めた。ナルシッサはマントをはらりと脱いで打ち捨て、座り込んで、膝の上で組んだ震える白い手を見つめた。

ベラトリックスはもっとゆっくりとフードを下ろした。

妹の白きと対照的な黒髪、厚ぼったい瞼、がっちりした顎。ナルシッサの背後に回ってそこに立つまでの間、ベラトリックスはスネイプを凝視したまま目を離さなかった。

「それで、どういうご用件ですか？」スネイプは二人の前にある肘掛椅子に腰掛けた。

「ここには……ここには私たちだけです  
ね？」ナルシッサが小声で聞いた。

「むろん、そうです。ああ、ワームテールが  
いますがね。しかし、虫けらは数に人らんで

long black hair parted in curtains around a  
sallow face and black eyes.

Narcissa threw back her hood. She was so  
pale that she seemed to shine in the darkness;  
the long blonde hair streaming down her back  
gave her the look of a drowned person.

“Narcissa!” said the man, opening the door  
a little wider, so that the light fell upon her and  
her sister too. “What a pleasant surprise!

“Severus,” she said in a strained whisper.  
“May I speak to you? It’s urgent.”

“But of course.”

He stood back to allow her to pass him into  
the house. Her still-hooded sister followed  
without invitation.

“Snape,” she said curtly as she passed him.

“Bellatrix,” he replied, his thin mouth  
curling into a slightly mocking smile as he  
closed the door with a snap behind them.

They had stepped directly into a tiny sitting  
room, which had the feeling of a dark, padded  
cell. The walls were completely covered in  
books, most of them bound in old black or  
brown leather; a threadbare sofa, an old  
armchair, and a rickety table stood grouped  
together in a pool of dim light cast by a candle-  
filled lamp hung from the ceiling. The place  
had an air of neglect, as though it was not  
usually inhabited.

Snape gestured Narcissa to the sofa. She  
threw off her cloak, cast it aside, and sat down,  
staring at her white and trembling hands  
clasped in her lap. Bellatrix lowered her hood  
more slowly. Dark as her sister was fair, with  
heavily lidded eyes and a strong jaw, she did  
not take her gaze from Snape as she moved to  
stand behind Narcissa.

“So, what can I do for you?” Snape asked,

しょうな？」  
スネイプは背後の壁の本棚に杖を向けた。  
すると、バーンという音とともに、隠し扉が  
勢いよく開いて狭い階段が現れた。  
そこには小男が立ちすくんでいた。  
「ワームテール、お気づきのとおり、お客様  
だ」スネイプが面倒くさそうに言った。  
小男は背中を丸めて階段の最後の数段を下  
り、部屋に入ってきた。  
小さい潤んだ目、尖った鼻、そして間の抜け  
た不愉快なコタタ笑いを浮かべている。  
左手で右手をさすっているが、その右手は、  
まるで輝く銀色の手袋をはめているかのよう  
だ。  
「ナルシッサ！」小男がキーキー声で呼びか  
けた。  
「それにベラトリックス！ ご機嫌麗しくー  
ー」  
「ワームテールが飲み物をご用意しますよ。  
よろしければ」スネイプが言った。  
「そのあとこやつは自分の部屋に戻ります」  
ワームテールは、スネイプに何かを投げつけ  
られたようにたじろいだ。  
「わたしはあなたの召使いではない！」  
ワームテールはスネイプの目を避けながらキ  
ーキー言った。  
「ほう？ 我輩を補佐するために、闇の帝王が  
おまえをここに置いたとばかり思っていたの  
だが」  
「補佐というなら、そうですーでも、飲み  
物を出したりとかーあなたの家の掃除とか  
じゃない！」  
「それは知らなかったな、ワームテール。お  
まえがもっと危険な任務を渴望していたとは  
ね」  
スネイプはさざりと言った。  
「それならたやすいことだ。闇の帝王にお話  
し申し上げてー」  
「そうしたければ、自分でお話しできる！」  
「もちろんだとも」スネイプはニヤリと笑っ  
た。  
「しかし、その前に飲み物を持ってくるん  
だ。しもべ妖精が造ったワインで結構」  
ワームテールは、何か言い返したそうにしば  
らくぐずぐずしていたが、やがて踵を返し、

settling himself in the armchair opposite the  
two sisters.

“We ... we are alone, aren't we?” Narcissa  
asked quietly.

“Yes, of course. Well, Wormtail's here, but  
we're not counting vermin, are we?”

He pointed his wand at the wall of books  
behind him and with a bang, a hidden door  
flew open, revealing a narrow staircase upon  
which a small man stood frozen.

“As you have clearly realized, Wormtail, we  
have guests,” said Snape lazily.

The man crept, hunchbacked, down the last  
few steps and moved into the room. He had  
small, watery eyes, a pointed nose, and wore  
an unpleasant simper. His left hand was  
caressing his right, which looked as though it  
was encased in a bright silver glove.

“Narcissa!” he said, in a squeaky voice.  
“And Bellatrix! How charming —”

“Wormtail will get us drinks, if you'd like  
them,” said Snape. “And then he will return to  
his bedroom.”

Wormtail winced as though Snape had  
thrown something at him.

“I am not your servant!” he squeaked,  
avoiding Snape's eye.

“Really? I was under the impression that the  
Dark Lord placed you here to assist me.”

“To assist, yes — but not to make you  
drinks and — and clean your house!”

“I had no idea, Wormtail, that you were  
craving more dangerous assignments,” said  
Snape silkily. “This can be easily arranged: I  
shall speak to the Dark Lord —”

“I can speak to him myself if I want to!”

もう一つ別の隠し扉に入ってしまった。  
ボタンという音や、グラスがぶつかり合う音が聞こえてきた。  
まもなく、ワームテールが、埃っぽい瓶を一本とグラス三個を盆に載せて戻ってきた。  
グラグラするテーブルにそれを置くなり、ワームテールはあたふたとその場を離れ、本で覆われている背後の扉をボタンと閉めていなくなった。  
スネイプは血のように赤いワインを三個のグラスに注ぎ、姉妹にその二つを手渡した。  
ナルシッサは呟くように礼を言ったが、ベラトリックスは何も言わずに、スネイプを睨み続けた。  
スネイプは意に介するふうもなく、むしろおもしろがっているように見えた。  
「闇の帝王に」スネイプはグラスを掲げ飲み干した。  
姉妹もそれに倣った。  
スネイプがみんなに二杯目を注いだ。  
二杯目を受け取りながら、ナルシッサが急き込んで言った。  
「セプルス、こんなふうにお訪ねしてすみません。でも、お目にかからなければなりませんでした。あなたしか私を助けられる方はいないと思って……」  
スネイプは手を上げてナルシッサを制し、再び杖を階段の隠し扉に向けた。  
バーンと大きなひめい音と悲鳴が聞こえ、ワームテールが慌てて階段を駆け上がる音がした。  
「失礼」スネイプが言った。  
「やつは最近扉のところで聞き耳を立てるのが趣味になったらしい。どういうつもりなのか、我輩にはわかりませんがね……ナルシッサ、何をおっしゃりかけていたのですかかな？」  
ナルシッサは身を震わせて大きく息を吸い、もうし度話しはじめた。  
「セプルス、ここに来てはいけないことはわかっていますわ。誰にも、何も言うなと言われています。でも——」  
「それなら黙ってるべきだろう！」ベラトリックスが凄んだ。  
「特にいまの相手の前では！」

“Of course you can,” said Snape, sneering. “But in the meantime, bring us drinks. Some of the elf-made wine will do.”

Wormtail hesitated for a moment, looking as though he might argue, but then turned and headed through a second hidden door. They heard banging and a clinking of glasses. Within seconds he was back, bearing a dusty bottle and three glasses upon a tray. He dropped these on the rickety table and scurried from their presence, slamming the book-covered door behind him.

Snape poured out three glasses of bloodred wine and handed two of them to the sisters. Narcissa murmured a word of thanks, whilst Bellatrix said nothing, but continued to glower at Snape. This did not seem to discompose him; on the contrary, he looked rather amused.

“The Dark Lord,” he said, raising his glass and draining it.

The sisters copied him. Snape refilled their glasses. As Narcissa took her second drink she said in a rush, “Severus, I’m sorry to come here like this, but I had to see you. I think you are the only one who can help me —”

Snape held up a hand to stop her, then pointed his wand again at the concealed staircase door. There was a loud bang and a squeal, followed by the sound of Wormtail scurrying back up the stairs.

“My apologies,” said Snape. “He has lately taken to listening at doors, I don’t know what he means by it. ... You were saying, Narcissa?”

She took a great, shuddering breath and started again.

“Severus, I know I ought not to be here, I have been told to say nothing to anyone, but —

「いまの相手？」スネイプが皮肉たっぷりに繰り返した。

「それで、ベラトリックス、それはどう解釈すればよいのかね？」

「おまえを信用していないってことさ、スネイプ、おまえもよく知ってのとおり！」ナルシッサはすすり泣くような声を漏らし、両手で顔を覆った。

スネイプはグラスをテーブルに置き、椅子に深く座り直して両手を肘掛けに置き、睨みつけているベラトリックスに笑いかけた。

「ナルシッサ、ベラトリックスが言いたくとうずうずしていることを聞いたほうがよろしいようすな。さすれば、何度もこちらの話を中断される煩わしさもないだろう。さあ、ベラトリックス、続けたまえ」スネイプが言った。

「我輩を信用しないというのは、いかなる理由かね？」

「理由は山ほどある！」

ベラトリックスはソファの後ろからずかずかと進み出て、テーブルの上にグラスを叩きつけた。

「どこから始めようか！ 闇の帝王が倒れたとき、おまえはどこにいた？ 帝王が消え去ったとき、どうして一度も探そうとしなかった？ ダンブルドアの懷で暮らしていたこの歲月、おまえはいったい何をしていた？ 闇の帝王が『賢者の石』を手に入れようとしたとき、おまえはどうして邪魔をした？ 闇の帝王が蘇ったとき、おまえはなぜすぐに戻らなかった？ 数王のために予言を取り戻そうと我々が戦っていたとき、おまえはどこにいた？ それに、スネイプ、ハリー・ポッターはなぜまだ生きているのだ？ 五年間もおまえの手中にあったというのに」

ベラトリックスは言葉を切った。胸を激しく殴打たせ、頬に血が上っている。

その背後で、ナルシッサはまだ両手で顔を覆ったまま、身動きもせずに座っていた。

スネイプが笑みを浮かべた。

「答える前に――ああ、いかにも、ベラトリックス、これから答えるとも！ 我輩の言葉を、陰口を叩いて我輩が闇の帝王を裏切っているなどと、でっち上げ話をする連中に持ち

”

“Then you ought to hold your tongue!” snarled Bellatrix. “Particularly in present company!”

“ ‘Present company’?” repeated Snape sardonically. “And what am I to understand by that, Bellatrix?”

“That I don’t trust you, Snape, as you very well know!”

Narcissa let out a noise that might have been a dry sob and covered her face with her hands. Snape set his glass down upon the table and sat back again, his hands upon the arms of his chair, smiling into Bellatrix’s glowering face.

“Narcissa, I think we ought to hear what Bellatrix is bursting to say; it will save tedious interruptions. Well, continue, Bellatrix,” said Snape. “Why is it that you do not trust me?”

“A hundred reasons!” she said loudly, striding out from behind the sofa to slam her glass upon the table. “Where to start! Where were you when the Dark Lord fell? Why did you never make any attempt to find him when he vanished? What have you been doing all these years that you’ve lived in Dumbledore’s pocket? Why did you stop the Dark Lord procuring the Sorcerer’s Stone? Why did you not return at once when the Dark Lord was reborn? Where were you a few weeks ago when we battled to retrieve the prophecy for the Dark Lord? And why, Snape, is Harry Potter still alive, when you have had him at your mercy for five years?”

She paused, her chest rising and falling rapidly, the color high in her cheeks. Behind her, Narcissa sat motionless, her face still hidden in her hands.

帰るがよい。――答える前に、そうそう、逆に一つ質問するでしょう。君の質問のどれ一つを取ってみても、闇の帝王が、我輩に質問しなかったものがあると思うかね？ それに対して満足のいく答えをしていなかったら、我輩はいまこうしてここに座り、君と話をしていると思うかね？」ベラトリックスはたじろいだ。

「あの方がおまえを信じておられるのは知っている。しかし……」

「あの方が間違っていると思うのか？ それとも我輩がうまく編んだとでも？ 不世出の開心術の達人である、もっとも偉大なる魔法使い、闇の帝王に一杯食わせたとでも？」ベラトリックスは何も言わなかった。しかし、初めてぐらついた様子を見せた。スネイプはそれ以上追及しなかった。再びグラスを取り上げ、一口すすり、言葉を続けた。

「闇の帝王が倒れたとき我輩がどこにいたかと、そう聞かれましたな。我輩はあの方に命じられた場所にいた。 hogwarts 魔法魔術学校に。なんとすれば、我輩がアルバス・ダンブルドアをスパイすることを、あの方がお望みだったからだ。闇の帝王の命令で我輩があの職に就いたことは、ご承知だと拝察するが？」

ベラトリックスはほとんど見えないほどわずかに頷いた。

そして口を開こうとしたが、スネイプが機先を制した。

「あの方が消え去ったとき、なぜお探ししようとしなかったかと、君はそうお尋ねだ。理由はほかの者と同じだ。エイブリー、ヤックスリー、カローたち、グレイバック、ルシウス……」スネイプはナルシッサに軽く頭を下げた。

「そのほかあの方をお探ししようとしなかった者は多数いる。我輩は、あの方はもう滅したと思った。自慢できることではない。我輩は間違っていた。しかし、いまさら詮ないことだ……。あのときに信念を失った者たちを、あの方がお許しになっていなかったら、あの方の配下はほとんど残っていなかっただろう」

「私が残った！」ベラトリックスが熱っぽく

Snape smiled.

“Before I answer you — oh yes, Bellatrix, I am going to answer! You can carry my words back to the others who whisper behind my back, and carry false tales of my treachery to the Dark Lord! Before I answer you, I say, let me ask a question in turn. Do you really think that the Dark Lord has not asked me each and every one of those questions? And do you really think that, had I not been able to give satisfactory answers, I would be sitting here talking to you?”

She hesitated.

“I know he believes you, but …”

“You think he is mistaken? Or that I have somehow hoodwinked him? Fooled the Dark Lord, the greatest wizard, the most accomplished Legilimens the world has ever seen?”

Bellatrix said nothing, but looked, for the first time, a little discomfited. Snape did not press the point. He picked up his drink again, sipped it, and continued, “You ask where I was when the Dark Lord fell. I was where he had ordered me to be, at Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry, because he wished me to spy upon Albus Dumbledore. You know, I presume, that it was on the Dark Lord’s orders that I took up the post?”

She nodded almost imperceptibly and then opened her mouth, but Snape forestalled her.

“You ask why I did not attempt to find him when he vanished. For the same reason that Avery, Yaxley, the Carrows, Greyback, Lucius” — he inclined his head slightly to Narcissa — “and many others did not attempt to find him. I believed him finished. I am not proud of it, I was wrong, but there it is. ... If he had not forgiven we who lost faith at that time,



言った。

「あの方のために何年もアズカバンで過ごした、この私が！」

「なるほど。見上げたものだ」スネイプは気のない声で言った。

「もちろん、牢屋の中では大してあの方のお役には立たなかったが、しかし、その素振りにはまさにご立派——」

「そぶり！」ベラトリックスが甲高く叫んだ。

怒りで狂気じみた表情だった。

「私が吸魂鬼に耐えている間、おまえはホグワーツに居残って、ぬくぬくとダンブルドアに寵愛されていた！」

「少し違いますな」スネイプが冷静に言った。

「ダンブルドアは我輩に、『闇の魔術に対する防衛術』の仕事を与えようとしなかった。そう。どうやら、それが、あー、私が引き戻されるかもしれないと思ったようだな……誘惑に負けて昔の道に」

「闇の帝王へのおまえの犠牲はそれか？好きな科目が教えられなかったことなのか？」

ベラトリックスが嘲った。

「スネイプ、ではなぜ、それからずっとあそこに居残っていたのだ？死んだと思ったご主人様のために、ダンブルドアのスパイを続けたとでも？」

「いいや」スネイプが答えた。

「ただし、我輩が職を離れなかったことを、闇の帝王はお喜びだ。あの方が戻られたとき、我輩はダンブルドアに関する十六年分の情報を持っていた。ご帰還祝いの贈り物としては、アズカバンの不快な思い出の垂れ流しより、かなり役に立つものだが……」

「しかし、おまえは居残った……」

「そうだ、ベラトリックス、居残った」スネイプの声に、初めて苛立ちの色が覗いた。

「我輩には、アズカバンのお勤めより好ましい、居心地のよい仕事があった。知ってのとおり、死喰い人狩りが行われていた。ダンブルドアの庇護で、我輩は監獄に入らずにすんだ。好都合だったし、我輩はそれを利用した。重ねて言うが、闇の帝王は、我輩が居残ったことをとやかくおっしゃらない。それな

he would have very few followers left.”

“He’d have me!” said Bellatrix passionately. “I, who spent many years in Azkaban for him!”

“Yes, indeed, most admirable,” said Snape in a bored voice. “Of course, you weren’t a lot of use to him in prison, but the gesture was undoubtedly fine —”

“Gesture!” she shrieked; in her fury she looked slightly mad. “While I endured the dementors, you remained at Hogwarts, comfortably playing Dumbledore’s pet!”

“Not quite,” said Snape calmly. “He wouldn’t give me the Defense Against the Dark Arts job, you know. Seemed to think it might, ah, bring about a relapse ... tempt me into my old ways.”

“This was your sacrifice for the Dark Lord, not to teach your favorite subject?” she jeered. “Why did you stay there all that time, Snape? Still spying on Dumbledore for a master you believed dead?”

“Hardly,” said Snape, “although the Dark Lord is pleased that I never deserted my post: I had sixteen years of information on Dumbledore to give him when he returned, a rather more useful welcome-back present than endless reminiscences of how unpleasant Azkaban is. ...”

“But you stayed —”

“Yes, Bellatrix, I stayed,” said Snape, betraying a hint of impatience for the first time. “I had a comfortable job that I preferred to a stint in Azkaban. They were rounding up the Death Eaters, you know. Dumbledore’s protection kept me out of jail; it was most convenient and I used it. I repeat: The Dark Lord does not complain that I stayed, so I do

のに、なぜ君がとやかく言うのかわからんね」

「次に君が知りたかったのは」  
スネイプはどんどん先に進めた。  
ベラトリックスがいまにも口を挟みたがっている様子だったので、スネイプは少し声を大きくした。

「我輩がなぜ、闇の帝王と『賢者の石』の間に立ちはだかったか、でしたな。これはたやすくお答えできる。あの方は我輩を信用すべきかどうか、判断がつかないでおられた。君のように、あの方も、我輩が忠実な死喰い人からダンブルドアの犬になり下がったのではないかと思われた。あの方は哀れな状態だった。非常に弱って、凡庸な魔法使いの体に入り込んでおられた。昔の味方が、あの方をダンブルドアか魔法省に引き渡すかもしれないとのお懸念から、あの方はどうしても、かつての味方の前に姿を現そうとはなさらなかった。我輩を信用してくださらなかったのは残念でならない。もう三年早く、権力を回復できたものを。我輩が現実に見にしたのは、強欲で『賢者の石』に値しないクィレルめが石を盗もうとしているところだった。認めよう。我輩はたしかに全力でクィレルめを挫こうとしたのだ」

ベラトリックスは苦い薬を飲んだかのように口を歪めた。

「しかし、おまえは、あの方がお戻りになったとき、参上しなかった。闇の印が熱くなったのを感じても、すぐにあの方の下に馳せ参じはしなかったー」

「さよう。我輩は二時間後に参上した。ダンブルドアの命を受けて戻った」

「ダンブルドアのー？」ベラトリックスは逆上したように口を開いた。

「頭を使え！」スネイプが再び苛立ちを見せた。

「考えるがいい！二時間待つことで、たった二時間のことで、我輩は、確実にホグワーツにスパイとしてとどまれるようにした！闇の帝王の側に戻るよう命を受けたから戻るにすぎないのだと、ダンブルドアに思い込ませることで、以来ずっと、ダンブルドアや不死鳥

not see why you do.

“I think you next wanted to know,” he pressed on, a little more loudly, for Bellatrix showed every sign of interrupting, “why I stood between the Dark Lord and the Sorcerer’s Stone. That is easily answered. He did not know whether he could trust me. He thought, like you, that I had turned from faithful Death Eater to Dumbledore’s stooge. He was in a pitiable condition, very weak, sharing the body of a mediocre wizard. He did not dare reveal himself to a former ally if that ally might turn him over to Dumbledore or the Ministry. I deeply regret that he did not trust me. He would have returned to power three years sooner. As it was, I saw only greedy and unworthy Quirrell attempting to steal the stone and, I admit, I did all I could to thwart him.”

Bellatrix’s mouth twisted as though she had taken an unpleasant dose of medicine.

“But you didn’t return when he came back, you didn’t fly back to him at once when you felt the Dark Mark burn —”

“Correct. I returned two hours later. I returned on Dumbledore’s orders.”

“On Dumbledore’s — ?” she began, in tones of outrage.

“Think!” said Snape, impatient again. “Think! By waiting two hours, just two hours, I ensured that I could remain at Hogwarts as a spy! By allowing Dumbledore to think that I was only returning to the Dark Lord’s side because I was ordered to, I have been able to pass information on Dumbledore and the Order of the Phoenix ever since! Consider, Bellatrix: The Dark Mark had been growing stronger for months. I knew he must be about to return, all the Death Eaters knew! I had plenty of time to think about what I wanted to do, to plan my

の騎士団についての情報を流すことができた！ いいかね、ベラトリックス。闇の印が何ヶ月にもわたってますます強力になってきていた。我輩はあの方がまもなくお戻りになるに違いないとわかっていたし、死喰い人は全員知っていた！ 我輩が何をすべきか、次の動きをどうするか、カルカロフのように逃げ出すか、考える時間は十分にあった。そうではないか？」

「我輩が遅れたことで、はじめは闇の帝王のご不興を買った。しかし我輩の忠誠は変わらないとご説明申し上げたとき、いいかな、そのご立腹は完全に消え去ったのだ。もっともダンブルドアは我輩が味方だと思っていたがね。左様。闇の帝王は、我輩が永久にお側を去ったとお考えになったが、帝王が間違っておられた」

「しかし、おまえが何の役に立った？」  
ベラトリックスが冷笑した。

「我々はおまえからどんな有用な情報をもらったというのだ？」

「我輩の情報は闇の帝王に直接お伝えしてきた」スネイプが言った。

「あの方がそれを君に教えないとしても…」

「あの方は私にすべてを話してくださる！」  
ベラトリックスはたちまち激昂した。

「私のことを、もっとも忠実な者、もっとも信頼できる者と呼びになる——」

「なるほど？」スネイプの声が微妙に屈折し、信じていないことを匂わせた。

「いまでもそうかね？ 魔法省での大失敗のあとでも？」

「あれは私のせいではない！」ベラトリックスの顔がさっと赤くなった。

「過去において、闇の帝王は、もっとも大切なものを常に私に託された——ルシウスがこんなことをしな——」

「よくもそんな——夫を責めるなんて、よくも！」

ナルシッサが姉を見上げ、低い、凄みの効いた声で言った。

「責めをなすり合っても詮なきこと」スネイプがすらりと言った。

「すでにやってしまったことだ」

next move, to escape like Karkaroff, didn't I?

“The Dark Lord’s initial displeasure at my lateness vanished entirely, I assure you, when I explained that I remained faithful, although Dumbledore thought I was his man. Yes, the Dark Lord thought that I had left him forever, but he was wrong.”

“But what use have you been?” sneered Bellatrix. “What useful information have we had from you?”

“My information has been conveyed directly to the Dark Lord,” said Snape. “If he chooses not to share it with you ——”

“He shares everything with me!” said Bellatrix, firing up at once. “He calls me his most loyal, his most faithful ——”

“Does he?” said Snape, his voice delicately inflected to suggest his disbelief. “Does he *still*, after the fiasco at the Ministry?”

“That was not my fault!” said Bellatrix, flushing. “The Dark Lord has, in the past, entrusted me with his most precious —— if Lucius hadn’t ——”

“Don’t you dare —— don’t you *dare* blame my husband!” said Narcissa, in a low and deadly voice, looking up at her sister.

“There is no point apportioning blame,” said Snape smoothly. “What is done, is done.”

“But not by you!” said Bellatrix furiously. “No, you were once again absent while the rest of us ran dangers, were you not, Snape?”

“My orders were to remain behind,” said Snape. “Perhaps you disagree with the Dark Lord, perhaps you think that Dumbledore would not have noticed if I had joined forces with the Death Eaters to fight the Order of the Phoenix? And —— forgive me —— you speak of dangers ... you were facing six teenagers, were

「おまえは何もしなかった！」ベラトリックスがカンカンになった。

「何もだ。我らが危険に身をさらしているときに、おまえはまたしても不在だった。スネイプ、違うか？」

「我輩は残っていよとの命を受けた」スネイプが言った。

「君は闇の帝王と意見を異にするのかもしれないがね。我輩が死喰い人とともに不死鳥の騎士団と戦っても、ダンブルドアはそれに気づかなかっただろうと、そうお考えなのかな？それに――失礼ながら――危険とか言われたようだが……十代の子ども六人を相手にしたのではなかったのかね？」

「加勢が来たんだ。知ってのとおり。まもなく不死鳥の騎士団の半数が来た！」

ベラトリックスが唸った。

「ところで、騎士団の話が出たついでに聞くが、本部がどこにあるかは明かせないと、おまえはまだ言い張っているな？」

「『秘密の守人』は我輩ではないのだからして、我輩がその場所の名前を言うことはできない。その呪文がどういう効き方をするか、ご存知でしょうな？闇の帝王は、騎士団について、我輩がお伝えした情報で満足していらっしやる。ご明察のことと思うが、その情報が過日エメリーン・バンスを捕らえて殺害することに結びついたし、さらにシリウス・ブラックを始末するにも当然役立ったはずだ。もっとも、やつを片付けた功績はすべて君のものだが」

スネイプは頭を下げ、ベラトリックスに杯を上げた。

ベラトリックスは硬い表情を変えなかった。

「私の最後の質問を避けているぞ、スネイプ。ハリー・ポッターだ。この五年間、いつでも殺せたはずだ。おまえはまだ殺っていない。なぜだ？」

「この件を、闇の帝王と話し合ったのかね？」スネイプが聞いた。

「あの方は……最近私たちは……おまえに聞いているのだ、スネイプ！」

「もし我輩がハリー・ポッターを殺していたら、闇の帝王は、あやつの血を使って蘇ることができず、無敵の存在となることも――」

you not?”

“They were joined, as you very well know, by half of the Order before long!” snarled Bellatrix. “And, while we are on the subject of the Order, you still claim you cannot reveal the whereabouts of their headquarters, don’t you?”

“I am not the Secret-Keeper; I cannot speak the name of the place. You understand how the enchantment works, I think? The Dark Lord is satisfied with the information I have passed him on the Order. It led, as perhaps you have guessed, to the recent capture and murder of Emmeline Vance, and it certainly helped dispose of Sirius Black, though I give you full credit for finishing him off.”

He inclined his head and toasted her. Her expression did not soften.

“You are avoiding my last question, Snape. Harry Potter. You could have killed him at any point in the past five years. You have not done it. Why?”

“Have you discussed this matter with the Dark Lord?” asked Snape.

“He ... lately, we ... I am asking you, Snape!”

“If I had murdered Harry Potter, the Dark Lord could not have used his blood to regenerate, making him invincible —”

“You claim you foresaw his use of the boy!” she jeered.

“I do not claim it; I had no idea of his plans; I have already confessed that I thought the Dark Lord dead. I am merely trying to explain why the Dark Lord is not sorry that Potter survived, at least until a year ago. ...”

“But why did you keep him alive?”

“Have you not understood me? It was only

「あの方が小僧を使うことを見越していた、とでも言うつもりか！」

ベラトリックスが嘲った。

「そうは言わぬ。あの方のご計画を知る由もなかった。すでに白状したとおり、我輩は闇の帝王が死んだと思っていた。ただ我輩は、闇の帝王が、ポッターの生存を残念に思っておられない理由を説明しようとしているだけだ。少なくとも一年前まではだが……」

「それならなぜ、小僧を生かしておいた？」

「我輩の話がわかっていないようだな？ 我輩がアズカバン行きにならずにすんだのは、ダンブルドアの庇護があったればこそだ。そのお気に入りの生徒を殺せば、ダンブルドアが我輩を敵視することになったかもしれない。違うかな？ しかし、単にそれだけでのことではなかった。ポッターが初めてホグワーツにやって来たとき、ポッターに関するさまざまな憶測が流れていたことを思い出していただく。彼自身が偉大なる闇の魔法使いではないか、だからこそ闇の帝王に攻撃されても生き残ったのだという噂だ。事実、闇の帝王のかつての部下の多くが、ポッターこそ、我々全員がもう一度集結し、擁立すべき旗頭ではないかと考えた。たしかに我輩は興味があった。だからして、ポッターが城に足を踏み入れた瞬間に殺してしまおうという気にはどうていなれなかった」

「もちろん、あいつには特別な能力などまったく無いことが、我輩にはすぐ読めた。やつは何度かピンチに陥ったが、単なる幸運と、より優れた才能を持った友人との組み合わせだけで乗りきってきた。徹底的に平凡なやつだ。もっとも、父親同様、独り善がりの癪に障るやつではあるが。我輩は手を尽くしてやつをホグワーツから放り出そうとした。学校にふさわしからぬやつだからだ。しかし、やつを殺したり、我輩の目の前で殺されるのを放置するのはどうかな？ ダンブルドアがすぐそばにいるからには、そのような危険を冒すのは愚かというものだ」

「それで、これだけあれこれあったのに、ダンブルドアが一度もおまえを疑わなかったと信じろというわけか？」ベラトリックスが聞いた。

Dumbledore's protection that was keeping me out of Azkaban! Do you disagree that murdering his favorite student might have turned him against me? But there was more to it than that. I should remind you that when Potter first arrived at Hogwarts there were still many stories circulating about him, rumors that he himself was a great Dark wizard, which was how he had survived the Dark Lord's attack. Indeed, many of the Dark Lord's old followers thought Potter might be a standard around which we could all rally once more. I was curious, I admit it, and not at all inclined to murder him the moment he set foot in the castle.

“Of course, it became apparent to me very quickly that he had no extraordinary talent at all. He has fought his way out of a number of tight corners by a simple combination of sheer luck and more talented friends. He is mediocre to the last degree, though as obnoxious and self-satisfied as was his father before him. I have done my utmost to have him thrown out of Hogwarts, where I believe he scarcely belongs, but kill him, or allow him to be killed in front of me? I would have been a fool to risk it with Dumbledore close at hand.”

“And through all this we are supposed to believe Dumbledore has never suspected you?” asked Bellatrix. “He has no idea of your true allegiance, he trusts you implicitly still?”

“I have played my part well,” said Snape. “And you overlook Dumbledore's greatest weakness: He has to believe the best of people. I spun him a tale of deepest remorse when I joined his staff, fresh from my Death Eater days, and he embraced me with open arms — though, as I say, never allowing me nearer the Dark Arts than he could help. Dumbledore has been a great wizard — oh yes, he has,” (for Bellatrix had made a scathing noise), “the Dark

「おまえの忠誠心の本性を、ダンブルドアは知らずに、いまだにおまえを心底信用しているというのか？」

「我輩は役柄を上手に演じてきた」スネイプが言った。

「それに、君はダンブルドアの大きな弱点を見逃している。あの人は、人の善なる性を信じずにはいられないという弱みだ。我輩が、まだ死喰い人時代のほとぼりも冷めやらぬころにダンブルドアのスタッフに加わったとき、心からの悔悟の念を縷々語って聞かせた。するとダンブルドアは両手を挙げて我輩を迎え入れた——ただし、先刻も言ったとおり、できうかぎり、我輩を闇の魔術に近づけまいとした。ダンブルドアは偉大な魔法使いだ（ベラトリックスが痛烈な反論の声を上げた）——ああ、たしかにそうだと。闇の帝王も認めている。ただ、喜ばしいことに、ダンブルドアは年老いてきた。闇の帝王との先月の決闘は、ダンブルドアを動揺させた。その後も、動きにかつてほどの切れがなくなり、ダンブルドアは深手を負った。しかしながら、長年にわたって一度も、このセブルス・スネイプへの信頼は途切れたことがない。それこそが、闇の帝王にとっての我輩の大きな価値なのだ」

ベラトリックスはまだ不満そうだったが、どうやってスネイプに次の攻撃を仕掛けるべきか迷っているようだった。

その沈黙に乗じて、スネイプは妹のほうに水を向けた。

「さて……我輩に助けを求めにおいででしたな、ナルシッサ？」

ナルシッサがスネイプを見上げた。

絶望がはっきりとその顔に書いてある。

「ええ、セブルス。わ……私を助けてくださるのは、あなたしかいないと思います。ほかには誰も頼る人がいません。ルシウスは牢獄で、そして……」

ナルシッサは目をつむった。二粒の大きな涙が瞼の下から溢れ出した。

「闇の帝王は、私がその話をするのを禁じました」

ナルシッサは目を閉じたまま言葉を続けた。

「誰にもこの計画を知られたくないとお望み

Lord acknowledges it. I am pleased to say, however, that Dumbledore is growing old. The duel with the Dark Lord last month shook him. He has since sustained a serious injury because his reactions are slower than they once were. But through all these years, he has never stopped trusting Severus Snape, and therein lies my great value to the Dark Lord.”

Bellatrix still looked unhappy, though she appeared unsure how best to attack Snape next. Taking advantage of her silence, Snape turned to her sister.

“Now ... you came to ask me for help, Narcissa?”

Narcissa looked up at him, her face eloquent with despair.

“Yes, Severus. I — I think you are the only one who can help me, I have nowhere else to turn. Lucius is in jail and ...”

She closed her eyes and two large tears seeped from beneath her eyelids.

“The Dark Lord has forbidden me to speak of it,” Narcissa continued, her eyes still closed. “He wishes none to know of the plan. It is ... very secret. But —”

“If he has forbidden it, you ought not to speak,” said Snape at once. “The Dark Lord’s word is law.”

Narcissa gasped as though he had doused her with cold water. Bellatrix looked satisfied for the first time since she had entered the house.

“There!” she said triumphantly to her sister. “Even Snape says so: You were told not to talk, so hold your silence!”

But Snape had gotten to his feet and strode to the small window, peered through the curtains at the deserted street, then closed them

です。とても……嚴重な秘密なのです。でも——」

「あの方が禁じたのなら、話してはなりません」スネイプが即座に言った。

「闇の帝王の言葉は法律ですぞ」

ナルシッサは、スネイプに冷水を浴びせられたかのように息を呑んだ。

ベラトリックスはこの家に入ってから初めて満足げな顔をした。

「ほら！」ベラトリックスが勝ち誇ったように妹に言った。

「スネイプでさえそう言ってるんだ。しゃべるなど言われたんだから、黙っていなさい！」

しかしスネイプは、立ち上がって小さな窓のほうにツカツカと歩いていき、カーテンの隙間から人気のない通りをじっと覗くと、再びカーテンをぐいと閉めた。

そしてナルシッサを振り返り、顔をしかめてこう言った。

「たまたまではあるが、我輩はあの方の計画を知っている」スネイプが低い声で言った。

「闇の帝王が打ち明けた数少ない者の一人なのだ。それはそうだが、ナルシッサ、我輩が秘密を知る者でなかったなら、あなたは闇の帝王に対する重大な裏切りの罪を犯すことになったのですぞ」

「あなたはきっと知っていると思っていましたわ！」

ナルシッサの息遣いが少し楽になった。

「あの方は、セブルス、あなたのことをとてもご信頼で……」

「おまえが計画を知っている？」

ベラトリックスが一瞬浮かべた満足げな表情は、怒りに変わっていた。

「おまえが知っている？」

「いかにも」スネイプが言った。

「しかし、ナルシッサ、我輩にどう助けてはいいのか？ 闇の帝王のお気持ちが変わるよう、我輩が説得できているのなら、気の毒だが望みはない。まったくない」

「セブルス」ナルシッサが囁くように言った。

蒼白い頬を涙が滑り落ちた。

「私の息子……たった一人の息子……」

again with a jerk. He turned around to face Narcissa, frowning.

“It so happens that I know of the plan,” he said in a low voice. “I am one of the few the Dark Lord has told. Nevertheless, had I not been in on the secret, Narcissa, you would have been guilty of great treachery to the Dark Lord.”

“I thought you must know about it!” said Narcissa, breathing more freely. “He trusts you so, Severus. ...”

“You know about the plan?” said Bellatrix, her fleeting expression of satisfaction replaced by a look of outrage. “*You* know?”

“Certainly,” said Snape. “But what help do you require, Narcissa? If you are imagining I can persuade the Dark Lord to change his mind, I am afraid there is no hope, none at all.”

“Severus,” she whispered, tears sliding down her pale cheeks. “My son ... my only son ...”

“Draco should be proud,” said Bellatrix indifferently. “The Dark Lord is granting him a great honor. And I will say this for Draco: He isn’t shrinking away from his duty, he seems glad of a chance to prove himself, excited at the prospect —”

Narcissa began to cry in earnest, gazing beseechingly all the while at Snape.

“That’s because he is sixteen and has no idea what lies in store! Why, Severus? Why my son? It is too dangerous! This is vengeance for Lucius’s mistake, I know it!”

Snape said nothing. He looked away from the sight of her tears as though they were indecent, but he could not pretend not to hear her.

“That’s why he’s chosen Draco, isn’t it?”

「ドラコは誇りに思うべきだ」ベラトリックスが非情に言い放った。

「闇の帝王はあの子に大きな名誉をお与えになった。それに、ドラコのためにはっきり言っておきたいが、あの子は任務に尻込みしていない。自分の力を証明するチャンスを喜び、期待に心を躍らせて——」ナルシッサはさすがのようにスネイプを見つめたまま、本当に泣き出した。

「それはあの子が十六歳で、何が待ち受けているのかを知らないからだわ！ セブルス、どうしてなの？ どうして私の息子が？ 危険すぎるわ！ これはルシウスが間違いを犯したことへの復讐なんだわ、ええそうなのよ！」スネイプは何も言わず、涙が見苦しいものであるかのように、ナルシッサの泣き顔から目を背けていた。

しかし聞こえないふりはできなかった。

「だからあの方はドラコを選んだのよ。そうでしょう？」ナルシッサは詰め寄った。

「ルシウスを罰するためでしょう？」

「ドラコが成功すれば——」

ナルシッサから目を背けたまま、スネイプが言った。

「ほかの誰よりも高い栄誉を得るだろう」

「でも、あの子は成功しないわ！」ナルシッサがすすり上げた。

「あの子にどうしてできますよう？ 闇の帝王ご自身でさえ——」

ベラトリックスが息を呑んだ。

ナルシッサはそれで気が挫けたようだった。

「いえ、つまり……まだ誰も成功したことがないのですし……セブルス……お願い……あなたは初めから、そしていまでもドラコの好きな先生だわ……ルシウスの昔からの友人で……おすがりします……あなたは闇の帝王のお気に入りで、相談役としていちばん信用されているし……お願いです。あの方にお話しして、説得して——？」

「闇の帝王は説得される方ではない。それに我輩は、説得しようとするほど愚かではない」スネイプはすげなく言った。

「我輩としては、闇の帝王がルシウスにご立腹ではないなどと取り繕うことはできない。ルシウスは指揮を執るはずだった。自分自身

she persisted. “To punish Lucius?”

“If Draco succeeds,” said Snape, still looking away from her, “he will be honored above all others.”

“But he won’t succeed!” sobbed Narcissa. “How can he, when the Dark Lord himself —?”

Bellatrix gasped; Narcissa seemed to lose her nerve.

“I only meant ... that nobody has yet succeeded. ... Severus ... please ... You are, you have always been, Draco’s favorite teacher. ... You are Lucius’s old friend. ... I beg you. ... You are the Dark Lord’s favorite, his most trusted advisor. ... Will you speak to him, persuade him —?”

“The Dark Lord will not be persuaded, and I am not stupid enough to attempt it,” said Snape flatly. “I cannot pretend that the Dark Lord is not angry with Lucius. Lucius was supposed to be in charge. He got himself captured, along with how many others, and failed to retrieve the prophecy into the bargain. Yes, the Dark Lord is angry, Narcissa, very angry indeed.”

“Then I am right, he has chosen Draco in revenge!” choked Narcissa. “He does not mean him to succeed, he wants him to be killed trying!”

When Snape said nothing, Narcissa seemed to lose what little self-restraint she still possessed. Standing up, she staggered to Snape and seized the front of his robes. Her face close to his, her tears falling onto his chest, she gasped, “You could do it. *You* could do it instead of Draco, Severus. You would succeed, of course you would, and he would reward you beyond all of us —”

Snape caught hold of her wrists and



が捕まってしまったばかりか、ほかに何人も捕まった。おまけに予言を取り戻すことにも失敗した。さよう、闇の帝王はお怒りだ。ナルシッサ、非常にお怒りだ」

「それじゃ、思ったとおりだわ。あの方は見せしめのためにドラコを選んだのよ！」ナルシッサは声を詰ませた。

「あの子を成功させるおつもりではなく、途中で殺されることがお望みなのよ！」

スネイプが黙っていると、ナルシッサは最後にわずかに残った自制心さえ失ったかのようだった。

立ち上がってよろよろとスネイプに近づき、ロープの胸元をつかんだ。

顔をスネイプの顔に近づけ、涙をスネイプの胸元にこぼしながら、ナルシッサは喘いだ。

「あなたならできるわ。ドラコの代わりに、セブルス、あなたならできる。あなたは成功するわ。きっと成功するわ。そうすればあの方は、あなたにほかの誰よりも高い報奨を——」

スネイプはナルシッサの両手首をつかみ、しがみついている両手をはずした。

涙で汚れた顔を見下ろし、スネイプがゆっくりと言った。

「あの方は最後には我輩にやらせるおつもりだ。そう思う。しかし、まず最初にドラコにやらせると、固く決めていらっしゃる。ありえないことだが、ドラコが成功した暁には、我輩はもう少しホグワーツにとどまり、スパイとしての有用な役割を遂行できるわけだ」

「それじゃ、あの方は、ドラコが殺されてもかまわないと！」

「闇の帝王は非常にお怒りだ」スネイプが静かに繰り返した。

「あの方は予言を聞けなかった。あなたも我輩同様、よくご存知のことだが、あの方はやすやすとはお許しにならない

ナルシッサはスネイプの足下にくずおれ、床の上ですすり泣き、うめいた。

「私の一人息子……たった一人の息子……」

「おまえは誇りに思うべきだよ！」ベラトリックスが情け容赦なく言った。

「私に息子があれば、闇の帝王のお役に立つよう、喜んで差し出すだろう」

removed her clutching hands. Looking down into her tearstained face, he said slowly, “He intends me to do it in the end, I think. But he is determined that Draco should try first. You see, in the unlikely event that Draco succeeds, I shall be able to remain at Hogwarts a little longer, fulfilling my useful role as spy.”

“In other words, it doesn’t matter to him if Draco is killed!”

“The Dark Lord is very angry,” repeated Snape quietly. “He failed to hear the prophecy. You know as well as I do, Narcissa, that he does not forgive easily.”

She crumpled, falling at his feet, sobbing and moaning on the floor.

“My only son ... my only son ...”

“You should be proud!” said Bellatrix ruthlessly. “If I had sons, I would be glad to give them up to the service of the Dark Lord!”

Narcissa gave a little scream of despair and clutched at her long blonde hair. Snape stooped, seized her by the arms, lifted her up, and steered her back onto the sofa. He then poured her more wine and forced the glass into her hand.

“Narcissa, that’s enough. Drink this. Listen to me.”

She quieted a little; slopping wine down herself, she took a shaky sip.

“It might be possible ... for me to help Draco.”

She sat up, her face paper-white, her eyes huge.

“Severus — oh, Severus — you would help him? Would you look after him, see he comes to no harm?”

ナルシッサは小さく絶望の叫びを上げ、長いブロンドの髪を鷲づかみにした。

スネイプが屈んで、ナルシッサの腕をつかんで立たせ、ソファに誘った。

それからナルシッサのグラスにワインを注ぎ、無理やり手に持たせた。

「ナルシッサ、もうやめなさい。これを飲んで、我輩の言うことを聞くんだ」

ナルシッサは少し静かになり、ワインを撥ねこぼしながら、震える手で一口飲んだ。

「可能性だが……我輩がドラコを手助けできるかもしれん」

ナルシッサが体を起こし、蠟のように白い顔で眼を見開いた。

「セブルス……ああ、セブルス……あなたがあの子を助けてくださる？ あの子を見守って、危害が及ばないようにしてくださる？」

「やってみることはできる」

ナルシッサはグラスを放り出した。

グラスがテーブルの上を滑ると同時に、ナルシッサはソファを滑り降りて、スネイプの足下にひざまずき、スネイプの手を両の手で掻き抱いて唇を押し当てた。

「あなたがあの子を護ってくださるのなら……セブルス、誓ってくださる？ 『破れぬ誓い』を結んでくださる？」

「『破れぬ誓い』？」

スネイプの無表情な顔からは、何も読み取れなかった。

しかし、ベラトリックスは勝ち誇ったように高笑いした。

「ナルシッサ、聞いていなかったのかい？ ああ、こいつはたしかに、やってみるだろうよ……いつもの虚しい言葉だ。行動を起こすときにはなとうまくすり抜ける……ああ、もちろん闇の帝王の命令だろうともさ！」

スネイプはベラトリックスを見なかった。その暗い目は、自分の手をつかんだままのナルシッサの涙に濡れた青い目を見据えていた。

「いかにも。ナルシッサ、『破れぬ誓い』を結ぼう」スネイプが静かに言った。

「姉君が『結び手』になることにご同意くださるだろう」ベラトリックスは口をあんぐり開けていた。

スネイプはナルシッサと向かい合ってひざま

“I can try.”

She flung away her glass; it skidded across the table as she slid off the sofa into a kneeling position at Snape's feet, seized his hand in both of hers, and pressed her lips to it.

“If you are there to protect him ... Severus, will you swear it? Will you make the Unbreakable Vow?”

“The Unbreakable Vow?”

Snape's expression was blank, unreadable. Bellatrix, however, let out a cackle of triumphant laughter.

“Aren't you listening, Narcissa? Oh, he'll try, I'm sure. ... The usual empty words, the usual slithering out of action ... oh, on the Dark Lord's orders, of course!”

Snape did not look at Bellatrix. His black eyes were fixed upon Narcissa's tear-filled blue ones as she continued to clutch his hand.

“Certainly, Narcissa, I shall make the Unbreakable Vow,” he said quietly. “Perhaps your sister will consent to be our Bonder.”

Bellatrix's mouth fell open. Snape lowered himself so that he was kneeling opposite Narcissa. Beneath Bellatrix's astonished gaze, they grasped right hands.

“You will need your wand, Bellatrix,” said Snape coldly.

She drew it, still looking astonished.

“And you will need to move a little closer,” he said.

She stepped forward so that she stood over them, and placed the tip of her wand on their linked hands.

Narcissa spoke.

“Will you, Severus, watch over my son,

ずくように座った。  
ベラトリックスの驚きの眼差しの下で、二人は右手を握り合った。  
「ベラトリックス、杖が必要だ」スネイプが冷たく言った。  
ベラトリックスは杖を取り出したが、まだ啞然としていた。  
「それに、もっとそばに来る必要がある」スネイプが言った。  
ベラトリックスは前に進み出て、二人の頭上に立ち、結ばれた両手の上に杖の先を置いた。  
ナルシッサが言葉を発した。  
「セブルス、あなたは、闇の帝王の望みを叶えようとする私の息子、ドラコを見守ってくださいますか？」  
「そうしよう」スネイプが言った。  
眩しい炎が、細い舌のように杖から飛び出し、灼熱の赤い紐のように二人の手の周りに巻きついた。  
「そしてあなたは、息子に危害が及ばぬよう、力のかぎり護ってくださいますか？」  
「そうしよう」スネイプが言った。  
二つ目の炎の舌が杖から噴き出し、最初の炎と絡み合い、輝く細い鎖を形作った。  
「そして、もし必要になれば……ドラコが失敗しそうな場合は……」ナルシッサが囁くように言った（スネイプの手がナルシッサの手の中でピクリと動いたが、手を引っ込めはしなかった）。  
「闇の帝王がドラコに遂行を命じた行為を、あなたが実行していただけますか？」  
一瞬の沈黙が流れた。  
ベラトリックスは目を見開き、握り合った二人の手に杖を置いて見つめていた。  
「そうしよう」スネイプが言った。  
ベラトリックスの顔が、三つ目の細い炎の閃光で赤く照り輝いた。  
舌のような炎が杖から飛び出し、ほかの炎と絡み合い、握り合わされた二人の手にがっしりと巻きついた。  
縄のように。炎の蛇のように。

Draco, as he attempts to fulfill the Dark Lord's wishes?"

"I will," said Snape.

A thin tongue of brilliant flame issued from the wand and wound its way around their hands like a red-hot wire.

"And will you, to the best of your ability, protect him from harm?"

"I will," said Snape.

A second tongue of flame shot from the wand and interlinked with the first, making a fine, glowing chain.

"And, should it prove necessary ... if it seems Draco will fail ..." whispered Narcissa (Snape's hand twitched within hers, but he did not draw away), "will you carry out the deed that the Dark Lord has ordered Draco to perform?"

There was a moment's silence. Bellatrix watched, her wand upon their clasped hands, her eyes wide.

"I will," said Snape.

Bellatrix's astounded face glowed red in the blaze of a third tongue of flame, which shot from the wand, twisted with the others, and bound itself thickly around their clasped hands, like a rope, like a fiery snake.